

規則遵守問題と選言問題

水本 正晴 (Masaharu MIZUMOTO)

日本大学

意味とは何か。意味は突き詰めれば人間の頭にしかなく、それ以外にあるように思われるものはすべて人間の頭から派生したものにすぎない。そう考えれば人間の志向性についての研究がすべての意味についての理論の基礎となるはずである。他方、意味とは自然の中においてもありふれたものであり、人間の志向性はその中の少々複雑なものの一つにすぎない、という考えもある。だがもちろんこの後者の立場においても、人間の志向性を説明することは最も重要な（そして困難な）課題である。ドレッキ (1986) の理論は、そうした自然主義的立場から人間の志向性を説明しようとするものであるが、そのような理論が直面する最も困難な問題が選言問題である。

選言問題は、表象関係を因果的法則関係によって説明しようとするどのような理論も直面する問題であり、それによれば、例えばタイプ F に属する事態を知覚したとき、そしてそのときにのみ引き起こされるあるニューロン群の発火パターンを C としても、「C は F を表象する」とは言えない、ということになる。というのも、表象が表象であるためにはその内容が確定していること、延いては「誤表象」が可能であることが必要であるが、C と F の関係が厳密に法則的である限り誤表象の可能性はないし、もし時に C がタイプ G に属する事態によって引き起こされるとすれば、今度は C は G を F と「誤って」表象しているのか、それともそもそも C は実は「F または G」という選言的内容を持つのでありそれゆえそこでも C は真であるのか、が区別できないからである。

この困難は、(進化史や学習の場面に訴える) ドレッキの理論の中でも解決されたとは言いがたい。今、C は主に F によって引き起こされるが、時に G によっても引き起こされるとしよう。C が F についての表象であるためには、G によって引き起こされたときはそれを「誤り」とせねばならない。何が二つの状況を一方は正しい表象、他方は誤表象とするのであろうか。ドレッキの訴える進化史や学習過程の事実は、これを「外から」うまく説明する。だが、それは肝心の一人称的実感を説明できない。これを規則遵守問題で見よう。

あなたが「プラス」の意味で記号「+」を理解したつもりで計算する。ところが周りの人は、それは全く間違った計算だと言う。あなたは驚いて、「プラスはこれで正しいでしょ？」と確かめるが、みなそれに同意しない。計算の例は、盲目的な身体運動の問題と考える行動主義的解釈があり余計な混乱を招くため、より選言問題に近い例を考えよう。あなたはある事態を見て F だと言う。あなたはこれまでもそれをそのように呼んできたし、そう呼ぶように学んだ、はずである。そして他の人も同様に F と呼んできた、はずである。だが今、他の人はみなそれは F ではなく G であると言う。あなたは G も知っているはずであるが、それはどう見ても G ではなく F に「見える」。どちらの例においても、多数決で正しさが決まるのであれば、あなたは誤ってい

る。そしてそれゆえ誤表象しているように思われる。だが、誤表象には単なる多数決以上の、単なる外側からの規準以上の、内実があるのではないだろうか。そして第3者からの解釈から独立な「本当の」心的内容、というものがあるのではないだろうか。たとえば第2の例であなたがあきらめて人に従いそれをGと呼んだとしても、それは単に行動の仕方を変えたにすぎない。もしそれが誤表象で言われていたことの全てであったとするならば、要するに誤表象とは誤った行動の体系のことであったということであり、志向性とは外からの解釈にすぎなかったのである。だがこのような安易な行動主義で我々は満足するしかないのであれば、これはほとんど「認知科学」というものの否定に等しいように思われる。

規則遵守問題、あるいは規則遵守のパラドクスは、クリプキ的解釈によれば、語で何かを意味していた、という事実は存在しない、という懐疑主義的帰結を持つ。だがもちろん語の意味についての懐疑は心的内容についての懐疑もすでに含んでおり、脳内の何か（記号、表象）に訴えるだけでは単なる論点先取となりこの問題は解決できない。それでも1人称的観点からは、「それはFだ」と思った、という事実は否定できないのではないだろうか。だが、あなたがそのとき、他の人なら決してFと見なさず、Gに属すると考えるものをもFと見なししていたということが判明したとしよう。そのときあなたは「それはFだ」と思ったというよりは、「それはFまたはGだ」と思っていたのではないだろうか。そこであなたはFでなく「FまたはG」に対応する私的言語F'を使っていたのだと言えるなら、すべての心的内容についても、FでなくF'のようなものかもしれない、という可能性を排除できないことになる。結局あなたは自分自身の心的内容についても確信を持ってないことになりはしないだろうか。

このように、選言問題が単に3人称的な観点からしか（志向性の問題としての）意味の規範性の問題を捉えていなかったのに対し、規則遵守問題は1人称的な観点からも同じ問題を浮かび上がらせる。そして後者の観点こそが、これら志向性、意味の規範性、および心的内容の問題一般を考察する際に決定的な役割を演じることを示すが、本発表の目的の一つである。

以下大まかな解答の道筋を示しておこう。まず、誤表象（心的内容一般）を単なる外からの解釈としてしまわないためには、1人称的観点からの何らかの「誤りの認識能力」が必要であることが論じられる。次に、デイヴィドソンによる似た誤りの認識の要請が強すぎることを見た後、形式的信念変化理論におけるアップデートと改訂の区別に基づき、論点先取とならない「ミニマルな誤り認識能力」として信念改訂能力を捉えることを提案する。このとき発達心理学のデータが説得的な論拠を提供するであろう。この誤り認識能力に基づく規則遵守問題への解答を見た後、それを3人称的観点から再構成し、選言問題の解答とする。（これはさらに、クリプキ的指示の理論との対決、およびクリプキにより「群概念理論」として退けられたウィトゲンシュタイン流の意味論の復権へと繋がるが、そこまで展開する時間は恐らくないであろう。）

なお、本発表は拙訳F・ドレツキ『行動を説明する～因果の世界における理由』（勁草書房、2005年）の訳者解説と密接に関連している。そちらをまず読んでいただければ、本発表の内容は格段に理解し易くなるであろう。（もちろん読んでない方にも理解できるよう最大限配慮するつもりである。）